

2026 年度アメリカ文学シンポジウム

アメリカ文学における沈黙と記憶

——ホーソン、トウェイン、フォークナーが紡ぐ「語られない声」の想起

(主旨)

2024 年、アメリカ文学界に一冊の小説が投じた波紋は、きわめて大きなものだった。黒人作家パーシヴァル・エヴェレットによる『ジェイムズ』(James) である。全米図書賞とピューリッツァー賞をダブル受賞し、2025 年のベストセラーにも名を連ねたこの作品は、マーク・トウェインの古典『ハuckleberry Finn』(Adventures of Huckleberry Finn) に登場する逃亡奴隷ジムの視点から、かの冒険を語り直したものである。原作の語り手ハックの眼差しからは決して届かなかった出来事、感情、内なる声、それらがここでは赤裸々に、そして雄弁に描き出される。

ジムの声は、長らく沈黙を強いられてきた声である。それはすなわち、集団的記憶の表層から、なんらかの力によって消し去られてきた声にはほかならない。翻って考えれば、トウェインの作品には奴隷制度という記憶が、ナサニエル・ホーソンの作品には家父長制的権力と暴力という記憶が、そしてウィリアム・フォークナーの作品には南部の栄光と悲劇という記憶が、それぞれ深く刻み込まれていることが分かる。

本シンポジウムでは、これら三作家の作品を「語られない声」、「記憶」をキーワードに横断的に読み解きながら、公式な歴史の陰に封じられてきた声がいかにして文学的空間において想起されるかを多角的に考察するものである。

・「語られぬ声」の回帰——『ハuckleberry Finn』における 奴隷制の記憶と語りの戦略

発題者：鈴木 孝 (日本大学理工学部教授)

マーク・トウェインの『ハuckleberry Finn』において、奴隷制という歴史的現実、語り手ハックの無垢な視点によって覆い隠されながらも、物語の周縁に断片的な形で絶えず回帰する。少年の眼差しの背後には、アメリカ社会が忘却しようとしてきた「語られぬ声」が静かに潜んでいるのである。

本発表では、逃亡奴隷ジムの主体的知性を描いたパーシヴァル・エヴェレットの現代的応答作『ジェイムズ』を補助線に用い、原作に刻まれた奴隷制の記憶を問い直す。しかしながら、内面を露わにする『ジェイムズ』の視点は、一見すると原作におけるハックの限定的な語りを「欺瞞」や「欠落」として際立たせ、解釈を困難にする側面を持つ。

そこでこの困難さを、トウェインの逆説的な物語戦略として捉え直しながら、公式歴史が沈黙のうちに葬ってきた「語られぬ声」や「記憶」を、トウェインがいかに物語という形式を通じて掬い上げようとしたのかを解明してみたい。

・肖像画に不在の女たち——*The House of the Seven Gables*における
語られない声・記憶・ジェンダー

発題者：加納（内堀） 奈保子（日本大学危機管理学部准教授）

本発表は、Nathaniel Hawthorne(1804-1864)の *The House of the Seven Gables*(1851)における肖像画と女性の顔の描写に着目し、家族史の陰に抑圧された「語られない声」と「不在」がいかに表象されているのかを明らかにする。ピンチョン家の祖先の肖像画は、家父長制的権力と暴力の記憶を可視化する一方で、その枠組みから女性や周縁化された他者を排除し、「不在」を生成する装置として機能する。他方、ヘプジバーやフィービーといった女たちの顔は、そうした不在の痕跡を身体的に引き受け、言語化されない記憶を現在へと媒介している。本発表は、ピンチョン家の家父長たちの肖像画によって際立つ女たちの不在を踏まえながら、肖像画とは異なる方法を通して女たちの生と記憶が受け継がれ、もう一つの家族史、もう一つの米国史が紡がれていることを論じる。

・「ハイタワーの記憶と彼をめぐる記憶——記憶という名のそれぞれの記録」
発題者：和泉 周子（日本大学文理学部講師）

フォークナーの『八月の光』において、三人の主要登場人物のうちの一人であるハイタワーは、牧師であるにもかかわらず、説教壇で教義に南北戦争と同戦争中に疾駆する馬上で射殺された祖父の話混ぜ合わせた説教をし、教会員から神聖冒瀆と信じられるまでになっている。ハイタワーのこの振る舞いは彼が複数の幻影（“phantom”）と一つの亡霊（“ghost”）とともに大人になったことに由来し、彼のこの態度は妻にスキャンダルを引き起こさせ、最終的に彼から牧師の職を奪うことになるが、それでも彼はその土地（ジェファソン）に留まり続け、今は隠遁者として暮らしている。しかし、思いがけなく、残りの主要登場人物であるリーナの出産を助け、クリスマスをリンチから救う行動をとることになったことで現実世界との関わりを持つが、結局、彼は最後まで幻影と亡霊の記憶の中に身を置いたままである。本発表は、ハイタワーが幻影と亡霊の記憶の輪の外に出ることができないことの原因と効果を、主に祖父や父といった彼と関係の近

い人物が大きな影響を及ぼしているハイタワー自身の記憶と、彼と妻の関係性を再構築する役割も果たしている共同体（の人々）の記憶をもとにして考察するものである。